

第3回 双葉町復興まちづくり委員会 生活再建部会 議事概要

■日時：平成24年12月11日（月）午後2時00分～午後3時30分

■場所：双葉町役場埼玉支所 4階家庭科室

■出席者：別紙座席表のとおり

■議事概要

1. 開会

2. 議事

(1) 双葉町の教育の在り方について

資料2、3、4について事務局より説明後、質疑。委員の主な意見は、以下のとおり。

- 学校は双葉町の伝統芸能等を継承していく機関の1つであり、そうした観点からも学校の再開は必要である。
- 子供たちの絆を維持するための集いは、子どもたちはともに学んだから再会したいのであって、ともに学ばんでいない子供たちが集まるためには、相当なモチベーションがなければ難しい。
- 避難先に慣れてしまった子供たちには、その学校で力を発揮してもらい、双葉町のために何か頑張るといった教育は家庭でもらう以外にない。
- 学校は町のシンボル、心の拠り所であり、双葉町の子供たちが共に学ぶ場所を確保することが必要である。時間が経てば経つほど学校再開は難しく、時間との戦いである。
- 学校が一人でも希望があれば立ち上がるのであれば、今後の進路を迷っている家庭のためにも、学校再開に関する町民のアンケートを早急に行うべきではないか。
- 避難生活が長引けば避難先での生活スタイルも変わってくるため、双葉町の子供たちの再会の集いでも避難先ごとに子供たちが分かれてしまったと聞いている。再会の集いを実施する際にはこの点も工夫が必要。
- 学校を再開する場合でも、大人の感覚で双葉の子供たちを全て集める必要はなく、避難先でうまく順応しているのであればその地域で活躍してもらえばよい。
- 子供たちは町の将来を担う宝であり、文化や芸術等我々が残した色々なものを継承してもらうためにも、双葉町の町民として大事に育て上げる必要がある。
- 学校を再開するにしても月日が経ち多くの子供たちを集めることが難しい

中、避難先で馴染めないような子供たちを対象とした少人数教育が徹底できるような学校をまず最初にスタートさせることも1つの方法である。

- 仮の町における学校再開を議論する場合、受入自治体との関係において、双葉郡としての一部協同組合や広域連合といった形での学校の必要性も議論する必要があるのではないか。
- 他の町村に比べて学校立ち上げが遅れている現状において、とにかく早く学校を立ち上げて、これからの双葉町を担う子供たちの教育をしっかりと行うべき。
- 7000人の復興会議において多く意見として出された双葉町の人たちの教育に対する期待や誇りは、今後のまちづくりを進めていく上での重要な鍵、軸になると思われる。
- 他の町でも少人数指導で実績を上げている例もあるため、そうした売りをPRできるような学校づくりを目指していくべきではないか。
- 放射能への不安を抱える町民のためにも、県内に加えて、県外での学校立ち上げがあってもよいのではないか。
- 郡立、組合立の学校についても、双葉町の心の拠り所・伝統の継承等の観点から、町民が発想を転換できるか否かが問題であると思う。
- 広域連携での取組については、商工会での経験を踏まえてもうまくはいかない。郡立の学校については、その理想は理解するものの、その実現可能性及び双葉町の文化風土等の継承の観点から反対である。
- 仮の町においてどのように学校を再開させるべきかについては、仮の町を受入自治体との協調の中でどのように作っていくのかということと連動している。
- 学校は一日でも早く再開してもらいたいが、学校再開の場所については、仮の町が全く別の場所にできた場合の想定や、平成の大合併のような県を跨いだ市町村合併の事例も踏まえつつ、検討すべきではないか。
- 学校のみならず色々な分野での他町村との連携に関する議論の必要性について指摘が出てきたことについては、大切にしていけるべき。
- 広域連携で成功しているのは消防、ごみ、水道であるが、各町村の抱える事情が異なる中で、それ以外の分野では不可能である。次の世代を担う子供たちへの教育や文化の継承は、町が中心となって行うべきである。
- 学校再開の議論をするには、仮の町の拠点の選定を議論してからでないと、一歩前に進めないのではないか。また、親と子の繋がり・絆や町のコミュニティとの関係についても併せて考える必要があるのではないか。

- 仮の町の拠点を作るのと同時に、様々な事情でそこに集まり切れない人たちに対して、どのように双葉町の絆を継続していくのかが重要な課題である。
- 仮の町の拠点での学校教育に加えて、双葉の学校がない拠点の子供たちへの双葉教育をどうやって行っていくのかについても検討する必要がある。
- 双葉町への想いの強い子が残っているうちに、一刻も早く県内に1カ所でもいいから学校を立ち上げるべきである。
- 県外の中学校から県内の高校に入学する際に十分な情報がなく苦労した経験から、何らかの行政支援が必要ではないか。また、再開する学校に双葉の子供たちを集める方法として、全寮制の学校というのもあり得るのではないか。

(2) 「仮の町」に住まないと選択された方への支援について

資料5について事務局より説明後、質疑。委員の主な意見は、以下のとおり。

- 仮の町に住まないのは、既に自立してしまったり、仮の町がどこにできるか分からない等の理由が考えられるが、そうした方々へも手厚い行政支援は必要であるとともに、仮の町の拠点づくりが重要である。
- 仮設住宅等の入居期限に合わせた次の段階の居住の在り方について早急に見通しを立てる必要があり、それを示さなければ仮の町の意向調査を行っても町民は判断できない。
- 全国に避難している町民の孤立化を防ぐためにも、町民がある程度の規模で居住する拠点には、町民どおしが集まっておしゃべりしたり、情報を共有できる心の拠り所となるような場所が必要ではないか。
- 仮設住宅の構造はそもそも長期居住を前提としていないため、早急に仮の町を作って居住環境を整備すべき。また、仮の町の拠点も1つではなく、いくつかの拠点を作り、早く町民の生活が安定できるようにすべき。

(3) その他

- 7000人の復興会議において町民の意見を聞いてまとめることは大変良いことだと思うが、收拾がつかなくなるのではないか。また、同会議の出席率が悪いが、出席した町民の意見をもって町民の総意であるといっているのか。本委員会委員である町議会議員がずっと欠席したままで、委員会で取りまとめたことが町議会で反故にされることとならないか心配している。
- 本委員会の運営方法として、これまで前例のない町の将来を決める必要が

あることに鑑み、まずは町民の意見を広く聞くことを重要視している。現在行っている委員会での議論は、今後 7000 人の復興会議での町民の意見や住民意向調査の結果が出てきた際に、どのように判断すべきか判断し易くするために行っているものであり、結論を出す芽が多く出てきていると理解すべきであると思われる。

3. 委員会

第3回生活再建部会座席表

(敬称略)

渡邊 高野
ゆかり 重紘

1 日時 平成24年12月11日(火)

14:00~15:30

2 場所 双葉町埼玉支所 4階家庭科室

田中 清一郎		三井所 清典	駒田
井上 六郎		鈴木 浩	事務局 吉野
松本 浩一			佐野
荒木 幸子		中村 希雄	
笠原 真一		鶴沼 友恵	事務局
吉田 清己		井上 一芳	
山下 正夫		高野 憲一	
大沼 武		(代理) 山本 一弥	